

## 身体的活動を基盤とした造形・音楽の融合的表現の意義 I — 幼児期における感性の育みを意図した仮説構築を中心に —

北尾岳夫\*<sup>1)</sup>, 深尾秀一<sup>1)</sup>, 柚木たまみ<sup>1)</sup>, 三上佳子<sup>1)</sup>, 竹内晋平<sup>2)</sup>  
1) 滋賀短期大学 幼児教育保育学科, 2) 奈良教育大学 美術教育講座

Significance of Integrative Expression of Art and Music Based on Physical Activity I:  
Focusing on Hypothesis Building for the Development of Sensitivity in Early Childhood  
Takeo KITAO<sup>1)</sup>, Hidekazu FUKAO<sup>1)</sup>, Tamami YUNOKI<sup>1)</sup>, Yoshiko MIKAMI<sup>1)</sup>,  
Shimpei TAKEUCHI<sup>2)</sup>

1) Department of Early Childhood Care and Education, Shiga Junior College,  
2) Department of Fine Art Education, Nara University of Education

抄録：現在、保育者養成校の多くで、造形表現、音楽表現、身体表現の表現活動全般を融合する役割を持たせた、いわゆる「総合表現」と呼ばれる科目が展開されている。筆者らは、造形表現および音楽表現の基盤には身体性があるという立場に立ち、造形表現を支える動作・行為について運動学的な分析を行う中で、表現活動と身体動作は一体のものであるという視座を得るに至った。そこで本研究では、身体性を基盤とした幼児の表現に関する先行研究の動向を明らかにするとともに、保育実践研究の展開に向けた仮説を構築することを目的とした。先行研究の検討および身体性をめぐる議論を通して、身体・造形・音楽の融合による表現について3点の仮説を提示するとともに、造形表現、音楽表現、そして保育実践の立場から、表現活動に内包された身体的な動作・行為の特性等に関する論点を示すことができた。

キーワード：幼児教育、身体的活動、造形・音楽、融合的表現、感性

### 1. はじめに

全国の保育者養成校において、幼稚園教諭や保育士資格の取得に必要な最低限の科目に加え、各養成校のカリキュラム特性につながる様々な科目が設定されている。その特性に応じた基礎的な学びとして、学生たちは子どもの身体表現、造形表現、音楽表現を各論的に学ぶわけであるが、保育現場を目指すにあたり、これらを融合的に捉える学びも必要である。いわゆる「総合表現」<sup>1)</sup> と呼ばれる科目は各論をつなぐ役割を担う科目のひとつであると考えられるが、それぞれの表現を本質的に融合さ

---

\* E-mail: t-kitao@sumire.ac.jp

せて捉えるためには、何らかの学習支援につながる具体的改善が必要であると考え。

筆者ら（北尾ほか 2020）は、乳幼児の描画行為を運動学的視点から分析した調査<sup>2)</sup>を進める中で、表現活動と身体動作は一体のものであるという視座を得るに至った。造形・音楽の活動を身体という側面から再検討することによって、幼児の豊かな感性を育むことにつながる表現活動における、身体の役割について明らかにすることが必要であると考え。

そこで本研究では、身体性を基盤とした幼児の表現に関する先行研究の動向を明らかにするとともに、保育実践研究の展開に向けた仮説を構築することを目的とする。本研究の推進にあたっては、筆頭著者である北尾が研究の枠組みについて構想し、複数回の研究会議を経て共著者全員の合議により研究を遂行した。本稿執筆と校閲に関しても全員の共同によって行った。

## 2. 「身体 造形 音楽」の融合に関連する先行研究の動向

### 2.1 先行研究検索の手続き

本章においては、身体・造形・音楽に関連する先行研究を概観するとともに、本研究の立場を明らかにしていきたいと考える。先行研究の収集にあたっては、国立情報学研究所が提供する論文データベース「CiNii Articles」（<https://ci.nii.ac.jp/>）を使用し、「身体 造形 音楽」を検索語として論文検索を行った（最終アクセス：2020年8月13日）。検索の結果、「身体 造形 音楽」の検索語に対してヒットしたのは、表1に示すとおり26報であった（重複して複数回ヒットした論文は1報のみカウントした）。それらのうち、保育・乳幼児・保育者養成等を対象とした研究に該当しないと判断される5報の論文（表1における「論題」の列内に注記した）を除外すると、本研究において検討すべきと考えられる先行研究は合計21報となった。

### 2.2 先行研究の概観と「身体 造形 音楽」による表現を相互に関連付ける視点に着目した検討

前節で述べた手続きによって抽出した先行研究について、まずは刊行時期を視点に概観を試みる。保育または乳幼児が対象の研究、保育者養成が対象の研究等に関する先行研究については、2010年以降2013年と2015年を除き毎年1～3報程度が報告されている。2018年には突出して8報が確認されるが、その背景として幼稚園教諭養成の教職課程再課程認定<sup>3)</sup>の申請（2018年 文部科学省提出）との関連が推察される。比較的早期に発表された論文として、安村ら（2010）による保育者養成校における「保育内容表現」関連科目のシラバス分析を扱った報告例<sup>4)</sup>や、今川（2011）による身体を視点とした音楽と造形の協同プロジェクトに関する報告例<sup>5)</sup>などがあげられる。以降、2019年にかけて継続的に「身体 造形 音楽」に関連した論文が報告されているが、全体的には保育または乳幼児について論じた研究よりも、保育者養成等を対象とした研究が量的に上回っている。以下、本節では「身体 造形 音楽」を関連付けている視点によって4グループを形成し、各先行研究において述べられている保育や保育者養成における意義について言及するとともに、本研究の立場を示したいと考える。

北尾 岳夫, 深尾 秀一, 柚木たまみ, 三上 佳子, 竹内 晋平

表1 CiNii Articlesによる論文検索結果(検索語「身体 造形 音楽」)

著者名	論題	掲載誌(巻号)	刊行年
本村健太	メディアアートとしてのVJ表現の可能性 インタラクティブ映像メディアの考察 <sup>(注)</sup>	電子情報通信学会技術研究報告・MVE, マルチメディア・仮想環境基礎(105(162))	2005
田上竜也	ポール・ヴァレリー『ストラトニケー』(抄訳) <sup>(注)</sup>	慶応義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学(42)	2006
直井崇, 森尻有貴, 山田一美	造形・図工活動における導入時のショートエクササイズの開発と実践評価 <sup>(注)</sup>	美術科教育学会誌(31)	2010
安村清美, 中原篤徳, 齊木美紀子	総合的な「表現」への取り組みⅠー保育者養成校における「保育内容表現」の現状と課題ー	田園調布学園大学紀要(5)	2010
小笠原大輔	「保育内容(表現)」における複合的教材の試みー「造形表現」「音楽表現」「身体表現」を一度に楽しむー	文京学院大学人間学部研究紀要(13)	2011
今川恭子	幼稚園における音楽と造形の協同プロジェクト「身体から始まる表現」	音楽教育実践ジャーナル(8(2))	2011
荒川恵子, 豊田典子, 豊田秀雄, 岡林典子	幼稚園訪問演奏会企画の内容及び構成についての一考察ー音楽と科学のコラボレーションの可能性を探るー	関西楽理研究(29)	2012
伊藤智里, 秋政邦江, 青井則子, 尾崎公彦, 入江慶太	総合表現(オペレッタ)における授業開発Ⅱー領域「言葉」「表現(身体表現・造形表現・音楽)」に関する科目内容とオペレッタ制作との関連ー	川崎医療短期大学紀要(34)	2014
吉川暢子	親子での表現遊びに関する意識と影響ー事前事後のアンケート調査からー	美術教育学研究(48)	2016
福西朋子, 柳瀬慶子, 林韓燮, 藤重育子	「表現指導法」授業における現状と課題ー保育学生の学びからー	高田短期大学紀要(34)	2016
北浦恒人, 滝沢ほだか, 横田典子	幼児から児童を対象とした総合的な表現活動の試みと支援ー手作り楽器を用いた参加型ペープサート音楽劇を中心としてー	岡崎女子大学・岡崎女子短期大学地域協働研究(2)	2016
福武幸世, 岡本直行	子どもの表現の育ちと保育者のかかわり方(1)ー保育者のイメージ画の描画やダンス創作シートを中心にー	新見公立大学紀要(38)	2017
竹内貞一	子どもの表現活動における身体性とコミュニケーションー音楽および身体表現の特性の視座からー	東京未来大学研究紀要(11)	2017
尾野明美, 佐藤みどり, 高地誠子, 齋藤史夫, 水野道子, 中山貴太	アクティブラーニング学習効果尺度の作成の試みー音楽・造形・身体表現系科目と演習科目に着目してー	小田原短期大学研究紀要(47)	2017
中村礼香	表現活動を通して育まれる資質・能力ー音楽表現活動に視点をあててー	鹿児島女子短期大学紀要(54)	2018
松下茉莉香, 中村礼香, 小松恵理子	子どもの表現活動の効果的指導方法に関する研究ー身体表現・音楽表現・造形表現を考慮した総合的表現指導の観点からー	鹿児島女子短期大学紀要(54)	2018
三好優美子, 渡邊 洋, 長谷川千里, 柳田憲一	総合表現(創作オペレッタ)における表現科目の連携:「音楽」「造形表現」「身体表現」の観点から	東京女子体育大学東京女子体育短期大学紀要(53)	2018
中村三緒子	表現活動に必要な知識・技能に関する考察ー学生時代に習得すべきと考える内容ー	淑徳大学短期大学部研究紀要(58)	2018
尾崎公彦, 青井則子, 入江慶太, 伊藤智里, 伊達希久子, 小合幾子	幼稚園教育要領改訂に伴う保育内容領域「表現」に求められる授業内容に関する考察ー新しい教職課程のモデルカリキュラムとの比較を通してー	川崎医療短期大学紀要(38)	2018
長崎結美	乳幼児のためのコンサートによる音楽教育の可能性(3)ー保育者養成の視点からー	帯広大谷短期大学紀要(55)	2018
松下茉莉香, 中村礼香, 小松恵理子	新幼稚園教育要領に基づく表現系科目のカリキュラム再構築についてー音楽表現・造形表現・身体表現の観点からー	志学館大学教職センター紀要(3)	2018
齋藤千明	能動的な美術鑑賞を促すための「造形・音楽・身体」総合表現活動ー栃木県立美術館におけるワークショップでの実践ー <sup>(注)</sup>	白鷗大学教育学部論集(12(1))	2018
市橋佳明, 八桁 健	領域「表現」に関する指導の実践的研究	中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究(4)	2018
家崎 萌	音楽を通じた造形活動による異文化交流の共同授業についてーブラハ公立小学校での授業「二つのメロディー」を中心にー <sup>(注)</sup>	美術教育学研究(51)	2019
藤井美津子	保育者養成校における表現指導の取り組みー授業の実践と学生の記録の分析から表現の深まりを目指してー	滋賀文教短期大学紀要(21)	2019
豊泉尚美, 鹿戸一範	「子どもの興味・関心から始まる プロジェクト・アプローチ」～音楽表現・造形表現・身体表現をつなぐ実践を通して考える～	秋草学園短期大学紀要(35)	2019

(注): 保育・乳幼児・保育者養成等を対象とした研究に該当しないと判断される論文

「身体 造形 音楽」を相互に関連づける視点として 1 点目にあげられるのは、幼稚園教育要領<sup>6)</sup>、保育所保育指針<sup>7)</sup>等に示されている「ねらい及び内容」に依拠した論調である。この観点に該当するのは、領域「表現」の「内容」に含まれている身体表現・造形表現・音楽表現等を統一的に指導・支援することの意義、または必要性等に関する指摘が含まれると判断される先行研究群である。例えば、小笠原(2012)による論文<sup>8)</sup>においては、幼児の「造形表現」「音楽表現」「身体表現」を別個ではなく「一まとまり」の表現として援助することが保育者に求められる点について言及されている。また、吉川(2016)による論文<sup>9)</sup>においても、子どもの造形活動という一面から表現をとらえるのではなく、多様な側面から総合的に考察することの必要性について指摘されている。一方で、尾崎ら(2018)による論文<sup>10)</sup>のように幼稚園教育要領等への依拠に加えて、大学・短期大学における幼稚園教諭養成課程の在り方を示したモデルカリキュラム<sup>11)</sup>等における規定を援用した論調のものも報告されている。このような保育や保育者養成に関連する法規・ガイドライン等に依拠した先行研究群は、一部を除いて保育や乳幼児を直接扱ったものではなく、保育者養成や大学生・短期大学生等を対象としたものの比率が高い傾向がみられた。

2 点目にあげられるのは総合的表現を視点としたグループに分類される先行研究であり、コンサートやワークショップの実践やオペレッタを中心とする実践を分析対象としたものである。長崎(2018)による論文<sup>12)</sup>では、乳幼児向けのコンサートへの学生の参画と出演が、保育者に必要な知識、技能、また態度の育成に有効であることを示したものである。北浦ら(2016)による論文<sup>13)</sup>は、造形・音楽・身体表現の指導を含むワークショップの後にペープサート音楽劇に参加するという親子参加型プログラムの実践を通して、造形・音楽・身体表現を含む総合的な表現活動の支援の在り方についての方向性を探るものである。三好ら(2018)による論文<sup>14)</sup>と伊藤ら(2014)による論文<sup>15)</sup>は、オペレッタを中心とした「総合表現」の授業実践を通じ、造形・音楽・身体表現科目の課題を指摘するとともに、他の科目間との連携も含め、保育者養成課程における「総合表現」の授業開発を目指したものである。松下ら(2018)による論文<sup>16)</sup>は、新幼稚園教育要領で取り上げられている 3 分野(自然・生活・文化)をテーマにした身体表現活動を造形・音楽表現という視点からも分析し、総合的な表現活動そのものの在り方や授業開発について論じたものである。以上の研究は、保育者養成につながる科目間の関係性や、いわゆる「総合表現」と呼ばれる科目の有効性や授業計画につなげていく内容であった。

そして 3 点目としては、プロジェクト・アプローチの理論に依拠して「身体 造形 音楽」の接続を論じた先行研究があげられる。今回の 21 報の中では、豊泉ら(2019)による論文<sup>17)</sup>がこれに該当すると判断した。プロジェクト・アプローチについては、杉浦(2004)による論文に詳述されており、「プロジェクト・アプローチにおけるプロジェクトとは、1 人ないし複数の子どもによる『特定のトピックをめぐって深化する研究 (in-depth study of a particular topic)』である」<sup>18)</sup>と説明されている。豊泉らの論文においては、保育所において子どもたちの興味・関心に基づいたテーマ(杉浦によると「トピック」)を中心としたプロジェクトを設定し、子どもたちが造形表現や音楽表現によって探究

的活動を展開した経過について報告がなされている。このように、問題解決の手段として子どもたちが「身体 造形 音楽」と関わっていくという論理は、子どもの思考や認識に沿った形の融合的表現の実現につながる考え方であると解釈される。

4点目にあげられるのは身体性を視点とした先行研究である。竹内(2017)による論文<sup>19)</sup>では、芸術学的視点から表現の分類を試みるとともに、特に音楽表現に伴う身体性に焦点を当てて領域「表現」における指導の在り方について論じている。その一方で、同論文においては造形表現における身体性について積極的に言及されておらず、表現モードの差異として音楽表現との特性の違いを示唆するものとなっている。この点は、幼児が見せるすべての表現を動作や行為から捉えようとする筆者らの立場とは性質を異にするものであるといえる。そして今川(2011)による論文<sup>20)</sup>は、自分の手をかたどって作成した土鈴様の「手」を使った、音楽表現と造形表現の実践報告である。子どもたち一人ひとりが「手」を作り、鑑賞することで自己の身体認識を深めていく様子や、打楽器として用いられる「手」の音色を楽しみ、他の打楽器と醸す音の調和を楽しむ様子が報告されている。

以上、4つのグループを形成することによって「身体 造形 音楽」に関連した先行研究のアウトラインを描出することを試みた。前述のように幼児について直接論じた研究は意外に少なく、特に学生や保育者を対象とした研究では、成人からの視点に基づいた芸術様式上の理由付けによって「身体 造形 音楽」の表現を統合することを試みた報告が散見された。いずれの論文も示唆に富んでいると解釈したが、筆者らによる研究では、造形や音楽による表現のプロセスにおける身体的活動も議論の対象にしようとしている点が独自の視点であると考ええる。なお、ここまでに述べた「CiNii Articles」によって抽出した21報の他にも、本研究が扱う「身体 造形 音楽」の融合的表現に深く関連する研究事例が複数あるため、これらについてもふれておきたい。松井ら(2018)による「身体表現と音楽表現の融合を目指して -保育者養成校における保育内容領域・表現の演習授業を通して-」<sup>21)</sup>においては、保育者養成課程における音楽表現・身体表現に関する授業科目に部分的な合同指導を取り入れ、融合的かつ横断的な学生の学びを意図した実践および自由記述の分析等についての報告がなされている。また、長崎ら(2017)の「幼児・児童を対象とする音楽と造形を融合した総合的な表現活動に関する研究 -『木育』を取り入れた楽器づくりと演奏実践を通して」<sup>22)</sup>では、幼児・児童が木製の楽器製作を行うとともに、それをういた演奏会の実践および質問紙調査の結果等についての言及がなされている。いずれの研究事例も複数の表現領域の融合を試みた貴重な報告であり、本研究が指向する「身体 造形 音楽」の融合的表現の体系化を検討する上で重要な示唆が含まれていると考える。

### 3. 表現活動における身体性に基づいた仮説構築

子どもの運動発達を概観すると、そのはじまりは新生児期における外部からの刺激や情報を受けて発生する不随意的な反射運動にある。その後、徐々に生理的な反射を抑制していきながら随意運動が出現し、感覚器や神経系、筋・骨格系の発達に伴い基本的な運動を獲得していく幼児期へとつながっ

ていく<sup>23)</sup>。特に幼児期は神経系の発達が著しい時期にあたり、生活環境や子ども自身の経験の影響を受けながら、生活動作を基盤に多様で複雑な運動を獲得していくことになる。生活の中で営まれる遊びを通じ、様々な「動き」を獲得するとともにそれらの動作は洗練され、生活動作だけでなくよりダイナミックな「動き」も身に付けていくことになる。

一方、幼児期は心と体が未分化な時期である。子どもは内面に抱く感情について「手足をバタバタさせる」「手を振り回す」「飛び跳ねる」「叩く」「物を投げる」といった行動で、全身を使って様々な動きで表現<sup>24)</sup>する。これらの身体運動を伴った幼少期の内面の表現行動は感情的ではあるが、共感性や表象能力の発達に伴い、心の内にある思いを能動的に表現する心情的な身体表現に結びつくものであると考えられる。

子どもの活動の中にみられる基本的な運動技能として分類された84種類の動き<sup>25)</sup>をもとに分析を行った、高原ら<sup>26)</sup>によるダンボール遊びの調査研究にみられるように、幼児期に獲得する基本的な運動技能と造形活動には関係性があるといえる。また吉岡ら<sup>27)</sup>は、光と影を素材とした造形表現活動にみられる身体動作を分析する中で、造形表現活動が身体活動の意味も持ち合わせていることを指摘している。これらのことから、幼児期の造形表現と身体運動が深い関係性にあることが理解できる。

また、小さな子どもたちが身体を揺らしてリズムを取ったりしながら全身を動かして音楽を楽しんでいる光景は想像するに難くないが、運動は音楽とも切り離せない関係<sup>28)</sup>にある。Zentner, M.ら<sup>29)</sup>によって、乳児期においても音楽にあわせた運動がみられることが報告されているとともに、登<sup>30)</sup>は音楽活動と動きの関係性を指摘し、音楽表現活動における「動きの可能性」を提案している。これらのことから、幼児期の音楽表現と身体運動が深い関係性にあることが理解できる。

このように幼児期の造形・音楽の表現活動は、それらの活動に伴う内面の表現も含めて「動き」（＝身体運動）と深い関係性があることが分かる。幼児期において何か「できる」ということは、運動によってできるということであり、まさに運動そのものであるといえる。幼児期の表現活動の基盤には身体的活動が存在し、造形・音楽表現の中でさらに「動き」が洗練されていくことで身体的活動が育まれていくものであることから、身体的活動と造形・音楽表現活動の間には相互作用の関係性があると考えられる。

筆者らは、まずは身体というものが基盤にあり、そこに造形・音楽表現が積み上がっていくという立場に立ち、以下3つの仮説を設けるとともに今後の研究継続によってこれらの仮説を検証していきたいと考える。

- ① 幼児期における造形・音楽等の表現活動に内包された身体的な動作・行為に対する運動学的分析を行うことによって、その特性を明らかにできるのではないかと。
- ② 「身体 造形 音楽」の融合的表現を体験することを通して、幼児期の感性を育み、対象・事象に対する認識や思考の力等を育成することができるのではないかと。

- ③ 身体性を視点とした表現教育理論による保育者養成および保育者研修等を推進することは、保育改善に効果があるのではないか。

## 4. 身体的活動を視点とした幼児の表現をめぐる論点

### 4.1 造形表現を支える身体的活動の事例

造形表現のはじまりのひとつに、身体と「もの」との出会いがある。子どもたちが「もの」と出会い、その「もの」との遊びの中で五感を働かせ、探求心を膨らませ個々の表現活動へと向かう。そしてその表現行為から、また次の表現活動へとつながっていくといえる。

子どもの身体の発達状態と出会う「もの」によって、感性への響き方が変わる。子どもたちは、見る、触るなどの行為を通じて感触を確かめながら、「もの」と身体の融合の中で「もの」、つまり造形素材の形状を変化させることが出来ることを体得していく。

一例として、粘土という「もの」と身体的活動の関わりについて取り上げてみる。

土の粉の場合、さわった感触と流動する粉の状態の変化などを指先や手のひらで感じ楽しむ。泥や土とのかかわりでは、身体的活動の軌跡が具現化され、粘土という素材の表面に残る痕跡を視覚的、触覚的に認識していく。粘土との関わりの中で、身体の発達に伴いできることを探す遊びに発展していく。粘土の重さや粘性を感じ、自分の体の機能のなかでどのように関わられるのか、五感を通して会得していくといえる。例えば、投げるという行為・表現ができるようになった身体の発達段階においては、片手で持てる軽すぎず重すぎない程度の量の粘土を持ち、木に粘土を投げつけ、引っ付いた粘土の状況を楽しみ、そしてその行為を繰り返し探求することによって、現象を自分のものとしていく(図1)。このように、身体と粘土との出会いから始まり、その後に獲得した粘土に対する行為、投げる、穴をあける、押しつける、伸ばす、丸めるなどの素朴な行為をとおして、個々の心情を具体的に表現していくこととなる。



図1 木に粘土を投げつける

粘土の場合は、その子どもの身体運動の軌跡が明確に表れる素材であるといえる。しかし、出会う「もの」すべてが、具体的に身体運動の軌跡を残すわけではない。水、空気、風、光や闇など様々である。水を例にあげると、プール遊びにおける身体に受ける水の抵抗感などは、具体的に軌跡が残るものではないが、子どもたちの感性に響き、確実に造形表現としての「ものとの出会いの」第一歩であるといえる。

子どもの心情などが造形表現として具現化される以前に、「もの」との関わりでの身体的活動が基盤となっていることを保育者は理解し、常に子どもたちの身体的経験をしっかりと把握して、その子どもたちの造形表現を育むことが重要であるといえる。

## 4.2 音楽表現と身体的活動の関係性

Purvis,J.と Samet,D.は、音楽活動を Listening (聴くこと・鑑賞)、Playing (楽器演奏)、Singing (歌唱)、Moving (舞踊・身体活動)、Creating (作曲・即興演奏)、Verbalizing (言語化)の6つに分類している<sup>31) 32)</sup>。ここでは、これら音楽活動のひとつひとつを音楽表現の手段という解釈で捉えることとする。

Listening の聴くという行為そのものは、身体運動的ではないものの、音感知・音楽聴取が発声・発語や身体的活動の表出につながることはいうまでもない。Playing には様々な楽器と奏法があり、楽器に対応した身体的活動が音楽表現となる。Singing は、表現者自身の身体が楽器となる。歌には言葉を乗せることができ、顔の表情や身体による表現を伴わせることもできる。Moving は身体的活動そのものであるが、意味を持たせた象徴的な動きが含まれる。Creating には無意識的な身体活動や音生成、発語における抑揚が含まれる。そして Verbalizing は、音感知・音楽聴取が感嘆詞を含めた言語的表出につながった場合を指すものであり、表情や身振り手振りによる補足が加わることも予測される。これらのことから、音楽表現活動は身体的活動の一方法、ひとつの手段であるといえる。そして、子どもの発達に重要な意味を持つ活動が、これら音楽表現活動に含まれていることがわかる。

また Sears,W.は、音楽という言葉には「音楽そのもの」「音楽を聴くこと」「環境の内に音楽をとり入れること」「音楽を演奏すること」の4つの意味が含まれている<sup>33) 34)</sup>と述べて音楽の在り方を示している。筆者は、これらにさらに「補助・補完」という在り方も加える必要があると考える。

ダンスやマーチングといった集団演技の際、音楽の介入により統一感や一体感が生まれる。また、バレエや体操競技、フィギュアスケート、アーティスティックスイミングといったスポーツ種目においては、集団のみならず単独の演技においても音楽が用いられている。これらの種目においては、音楽の利用が演技を行うタイミングの測りやすさにつながり、演技の連続性を作り出す手助けとなっている。そして、音楽作品に演技を乗せることにより、演技者には見通しのつけやすさ、全体像のつかみやすさが生じる。加えて、演技を観る観衆にも演技者の表現主題が伝達されやすくなる。さらに、演技完成までの過程に音楽の時間的要素とオノマトペ等の言語的要素が加わることにより、演技一つひとつの把握や説明、意味付けにも繋げることができると考える。このように音楽が身体的活動に付随することにより、音楽に身体的活動の補助・補完効果が生じると考える。

保育内容5領域の基本的な在り方として、領域別に特定の活動と結び付けるものでないことは周知の事実<sup>35)</sup>であり、子どもたちが日々行う活動は領域を融合させたものとなるはずである<sup>36)</sup>。音楽表現活動は身体的活動であるという認識を新たに持ちながら、身体的行動として乳児期の萌芽的な表出から発達・発展した子どもの主体性のもとで表される表現活動について模索していきたいと考える。そして更に、先に述べたあらゆる方法による音楽表現活動の手段および音楽の在り方を捉えつつ、「視覚的」「聴覚的」そして「運動的」な身体的活動である領域融合の新しい視点を持ちたい。



### 4.3 身体的活動を基盤とした保育実践

子どもは、体の諸感覚や言葉を使う身体的活動に夢中になって取り組む。そして身体的活動は、友達との関わりの中で相互に刺激し合いながら、より多様で豊かな表現を生み出していく。今回、紹介するのは、曲に合わせて伸び伸びと体を動かすという身体活動に刺激された子どもたちが、自分なりの表現を見出し、共有しなから楽しんだ「私たちのきらきらしよう」の遊びである。

#### 【事例】5歳児（カオリ、ユミ、シズカ）による「私たちのきらきらしよう」10月

カオリは、アニメの主人公になったように、曲に合わせて手足を伸び伸びと動かして躍動感あふれる動きをしている。ユミは、カオリに刺激を受け、真似ながら一緒に踊っている。カオリは、まるで振付師のように次々と動きを考えている。ユミはCDカセットの操作が得意で、曲の順番を考えながら踊っている。シズカは、体を動かすことには消極的だが、カオリやユミが踊っているのを楽しんでいる。

しばらくして、シズカが制作の場で金のリボンを割りばしにつけた体操リボンを考案し、作ったリボンをカオリに渡す。カオリは「シズカちゃんありがとう、ユミちゃんのも作って」と頼む。シズカは、嬉々としながらユミの体操リボンも作り始める。しばらくして、カオリとユミが、シズカにスカートも必要であることを伝える。作る材料に困っている子どもたちの様子を見ていた保育者が、3人の話を聞きながら一緒に材料を探す。シズカとカオリやユミは、イメージに合った材料を見つけると今度は3人でスカートを作り始める。

シズカは、スカートを作るとカオリたちの遊びに参加し、小さな紙を友達に配っている。小さな紙には「きらきらしよう」と書かれていた。

ユミはお客さんに鈴を用意していた。保育者が「鈴をどうするの？」と聞くと、ユミは「お客さんに、これ（鈴）をサービスと一緒に鳴らしてもらおう」と話をしてくれる。踊るのが大好きなカオリ、音楽が大好きなユミ、そしてものを作るのが得意なシズカの考えた「きらきらしよう」は大成功に終わる。

事例の中の一人ひとりの表現をみてみると、カオリは曲に合わせた体の動きとなるように試行錯誤しながら踊っている。ユミは、カオリと一緒にいろいろな踊りが楽しめるように曲の順番を考え、お客さんに喜んでもらえるように楽器を選択している。シズカは、カオリやユミの踊りを観ながら、2人のために踊りに使うものを考え、工夫する姿がみられる。一人ひとりが遊びのイメージを持ち、考えながら描いたり作ったりしている。そしてその表現を認め、共感してくれる友達や保育者の存在は大きく、表現への意欲にもつながっている。子どもの表現は、「踊る」という身体的活動を基盤に「もの」への認識や思考の力を培い、「ひと」との関係性の中で表現がより広がっていくことが分かる。

保育実践の中で、身体的活動が様々な表現の基盤になっていることを意識するとともに、表現の過程を楽しみ、子どもの主体性や相互に影響し合う関係性を十分に受け止め、認め、支えていくことが保育者には求められている。そして素材や用具を子どもと一緒に探したり、表現を言語化したりするなど、保育者の「つなぎ手」としての役割を意識した関わりをすることによって、表現は子どもとの関係性の中で広がり、より豊かな感性や表現力を養っていくと考えられる。

## 5. まとめと今後の展望

本研究の目的は、先行研究の動向について概観することを通して身体性を基盤とした幼児の表現に関する先行研究の動向を明らかにすること、そして幼児教育に関する実践研究の展開に向けた仮説を構築することであった。

第2章でふれたように本研究に関連する先行研究群を対象とし、幼稚園教育要領等に示された「ねらい及び内容」に依拠した事例、総合的表現を視点とした事例、身体性を視点とした事例、プロジェクト・アプローチの観点に依拠した事例等の4グループを形成して動向分析することを試みた。いずれも重要な論点を含んでいるが、幼児について直接論じた研究事例は全体的に少ない傾向が認められた。また第3章においては、表現活動における身体性について議論するとともに「身体 造形 音楽」の融合的表現の諸相を解明していくことを基本的な考え方とする3つの仮説を提示した。今後の継続研究において、これらについての検証を進めていきたいと考える。第4章において造形表現、音楽表現、そして保育実践の立場から言及した身体的な動作・行為の特性等は、いずれも仮説を検証する上で重視していきたい論点である。例えば同章・第1節で述べた、造形活動における身体的活動の軌跡としての粘土に表れた痕跡への着目に関する言及、そして第2節での身体的活動を補助・補完する役割としての音楽表現の意味についての言説等は、幼児期における造形・音楽等の表現活動に内包された身体的な諸相を明らかにしていく上で重要な論点であると考えられる。また第3節においてふれた、豊かな感性や表現力を育てていく上での身体が果たす役割について注目することは、本研究を推進するにあたって核心となる問題意識である。

本稿において、現時点では何らかの臨床的調査の実践は行われていないが、これまでに示したように「身体 造形 音楽」の融合的表現についての仮説構築および論点の整理を行うことができた。続報においてはこれらの枠組みに基づき、幼児が見せる表現の背景にある身体的活動の諸相を明らかにするとともに、幼児にとっての本質的な融合的表現に関する体系化を進めていきたいと考えている。

## 付記

本研究は令和2年度科学研究費基盤研究(C)(17K04781)の助成を受けた研究成果である。本稿は、筆者らによる令和3年度 科学研究費研究計画調書を部分的に参照し、全体に加筆した上で再構成したものである。

## 文献

- 1) 滋賀短期大学においては、保育の内容・方法に関する科目として「総合表現Ⅰ・Ⅱ」を開講している(2020年度現在)
- 2) 北尾岳夫・竹内晋平(2020)「乳幼児の造形活動を対象とした運動学的分析Ⅰ—描画動作の数量化に関する方法論を中心に—」 滋賀短期大学研究紀要 第45号 pp.93-100.

- 3) 文部科学省 Web サイト「教職課程再課程認定申請について」（下記 URL を 2020 年 10 月 22 日 閲覧）  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kyoin/1387995.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kyoin/1387995.htm)
- 4) 安村清美・中原篤徳・斉木美紀子（2010）「総合的な「表現」への取り組みⅠー保育者養成校における『保育内容表現』の現状と課題ー」 田園調布学園大学紀要 第 5 号 pp.201-216
- 5) 今川恭子（2011）「幼稚園における音楽と造形の協同プロジェクト『身体から始まる表現』」 音楽教育実践ジャーナル 第 8 巻 第 2 号 pp.30-37
- 6) 文部科学省（2018）「幼稚園教育要領解説」 フレーベル館
- 7) 厚生労働省（2018）「保育所保育指針解説」 フレーベル館
- 8) 小笠原大輔（2011）「『保育内容（表現）』における複合的教材の試みー『造形表現』『音楽表現』『身体表現』を一度に楽しむー」 文京学院大学人間学部研究紀要 第 13 号 pp.341-355
- 9) 吉川暢子（2016）「親子での表現遊びに関する意識と影響ー事前事後のアンケート調査からー」 美術教育学研究 第 48 号 pp.417-424
- 10) 尾崎公彦・青井則子・入江慶太・伊藤智里・伊達希久子・小合幾子（2018）「幼稚園教育要領改訂に伴う保育内容領域『表現』に求められる授業内容に関する考察ー新しい教職課程のモデルカリキュラムとの比較を通してー」 川崎医療短期大学紀要 第 38 号 pp.55-61
- 11) 文部科学省 Web サイト「幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究」（下記 URL を 2020 年 10 月 22 日 閲覧） [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/youchien/1385790.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1385790.htm)
- 12) 長崎結美（2018）「乳幼児のためのコンサートによる音楽教育の可能性（3）ー保育者養成の視点からー」 帯広大谷短期大学紀要 第 55 号 pp.35-43
- 13) 北浦恒人・滝沢ほかか・横田典子（2016）「幼児から児童を対象とした総合的な表現活動の試みと支援ー手作り楽器を用いた参加型ペープサート音楽劇を中心としてー」 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学 地域共同研究 第 2 号 pp.25-32
- 14) 三好優美子・渡邊洋・長谷川千里・柳田憲一（2018）「総合表現（創作オペレッタ）における表現科目の連携：「音楽」「造形表現」「身体表現」の観点から」 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要 第 53 号 pp.47-62
- 15) 伊藤智里・秋政邦江・青井則子・尾崎公彦・入江慶太（2014）「総合表現（オペレッタ）における授業開発Ⅱー領域「言葉」「表現（身体表現・造形表現・音楽）」に関する科目内容とオペレッタ制作との関連ー」 川崎医療短期大学紀要 34 号 pp.29-37
- 16) 松下茉莉香・中村礼香・小松恵理子（2018）「子どもの表現活動の効果的指導方法に関する研究ー身体表現・音楽表現・造形表現を考慮した総合的表現指導の観点からー」 鹿児島女子短期大学紀要 第 54 号 pp.81-90
- 17) 豊泉尚美・鹿戸一範（2019）「子どもの興味・関心から始まる プロジェクト・アプローチー音楽表現・造形表現・身体表現をつなぐ実践を通して考えるー」 秋草学園短期大学紀要 第 35 号 pp.152-160

- 18) 杉浦英樹 (2004) 「プロジェクト・アプローチにおけるプロジェクトモデルの妥当性 - レッジョ・エミリアの理論と実践による検討 -」 上越教育大学研究紀要 第23巻 第2号 p.394
- 19) 竹内貞一 (2017) 「子どもの表現活動における身体性とコミュニケーション - 音楽および身体表現の特性の視座から -」 東京未来大学研究紀要 Vol.11 pp.131-137
- 20) 今川恭子 (2011) 「幼稚園における音楽と造形の協同プロジェクト「身体から始まる表現」」 音楽教育実践ジャーナル Vol.8 No.2 pp.30-36
- 21) 松井典子・高橋仁美 (2018) 「身体表現と音楽表現の融合を目指して - 保育者養成校における保育内容領域・表現の演習授業を通して -」 滋賀短期大学研究紀要 第43号 pp.131-142
- 22) 長崎結美・馬場拓也 (2017) 「幼児・児童を対象とする音楽と造形を融合した総合的な表現活動に関する研究 - 『木育』を取り入れた楽器づくりと演奏実践を通して -」 帯広大谷短期大学地域連携推進センター紀要 第4号 pp.53-62
- 23) 三宅一郎 (2009) 「運動発達の科学 幼児の運動発達を考える」 大阪教育図書株式会社
- 24) 高野牧子 (2010) 「幼児期の感情表現および意識的な身体表現による母子間のコミュニケーション」 山梨県立大学人間福祉学部紀要 Vol.5 pp.17-34
- 25) 体育科学センター調整力専門委員会体育カリキュラム作成小委員会 (1980) 「幼稚園における体育カリキュラム作成に関する研究 (I) カリキュラムの基本的な考え方と予備調査の結果について」 体育科学 8 pp.150-155
- 26) 高原和子・瀧信子・矢野咲子・小川鮎子・小松恵理子 (2018) 「幼児の自発的なダンボール遊びにおける動きの内容」 福岡女学院大学大学院紀要 発達教育学 第6号 pp.33-45
- 27) 吉岡千尋・竹内晋平・川口奈々子・北尾岳夫 (2020) 「光と影を素材とした造形表現が幼児の身体動作に与える影響 - 3~5歳児への指導場面におけるエピソードを中心に -」 奈良教育大学 次世代教員養成センター研究紀要 第6号 pp.115-122
- 28) 三浦哲都・恵谷隆英・工藤和俊 (2017) 「音楽と運動の不可分な関係」 心理学ワールド 79号 pp.25-26
- 29) Zentner, M. & Eerola, T. (2010) 「Rhythmic engagement with music in infancy」 RESEARCH ARTICLE
- 30) 登啓子 (2012) 「子どもの音楽表現活動における動きの可能性 - 音楽・動き・言葉の融合された教育の検討 -」 帝京大学文学部教育学科紀要 37 pp.43-52
- 31) 松井紀和 (1996) 「音楽療法の手引 - 音楽療法家のための -」 第8版 pp.9-10 牧野出版
- 32) Purvis, J., Samet, S. (1976) 「Music in developmental therapy」 University Park Press
- 33) 同上書
- 34) 山松質文・堀真一郎・山本祥子 訳 (1971) (1972) 「音楽による治療教育」 上下巻 岩崎学術双書
- 35) 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018) 「幼保連携方認定こども園教育・保育要領解説」 pp.213-221 pp.289-301 フレーベル館
- 36) 石井玲子 編著 (2020) 「表現者を育てるための保育内容「音楽表現」」 pp.17-18 教育情報出版